
人生何が起こるかわからない

とりあえず頑張ってます

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生何が起こるかわからない

【Nコード】

N0910S

【作者名】

とりあえず頑張ってます

【あらすじ】

とりあえず読んでください！そしたら分かります。

いつも通りの・・・

人生というのはそう上手くいくものではないんです
だから・・・面白いのです

こちら辺で波乱万丈な人生の少年・・・全く予想のつかないその結
末とは！

「おはよ〜」

今日も陽気に起きてきた少年、その名も「学」

「早くしないと学校遅れるわよ〜」

これが、母親・・・忘れていたが僕は、現役バリバリ中学生だ。

「分かってるって」

まあ、そんな感じで今日も学校に行く学だった。

「よお、学！」

といつも俺が学校に来たときに声を掛けてくれる・・・忠志だ

「よお、忠志！」

といつも言われたとおりにしか返事を返せない
だって、そんな親交があるわけではない・・・言い忘れていた！学
は軽い人見知りだ、人と話すのが苦手だ。

特に、何も変わった事のない今日もいつも通りの学校生活が始まる
はずだった・・・

寝坊、自己紹介

「また寝坊だ！早く行かないと・・・」

「ほら学、遅刻するわよ」

「朝ごはんぐらい食べる。」

「無いよ。」

「ええ！また食べたの！？」

「ごめんねーほら早く行かないと遅れちゃうわよ」

「はーい」

そういえば忘れてた。家の母親誰のも何も関係なく食べちゃうのだ。

「はあーなんかいつもの通学路が長く感じる。やっとついた！」

「よお、学」

「おはよう、忠志。」

「なんか顔色悪いな。」

「そんな事ないよ。」

「そうか？」

「うん。」

「そんな事よりさ、聞いてくれよ。」

「いいよ。」

ピーンポーンポーンポーン
チャイムが鳴った、なるたびに思うがここの学校のチャイムは変わってる。

「はい、座って下さい。」

こいつが担任の加賀だ。

「はい、今日はいきなりですが自己紹介をしてもらいたいと思います。はい。」

こいつは、まともに話を聞かないとはいしか言っていないような感覚だ。

「はい。じゃあ、君から。」

名前を呼べば良いじゃんかと思うんだが・・・どうもコイツ本当に知らないらしい。

まあ、そうこうしてる間に僕の番が回ってくるのだ。

「学といいます。宜しくお願いします。」

「宜しくね。」

よかった皆から返事がきた

まあ、そんなこんなで自己紹介が終わったのである

「学君だよね？」

と、声を掛けてきたのは鈴という女の子だった。

「ぼぼ・・・僕に何のようですか？」

「いえ、なんでもありません。」

緊張した。そして鈴はニコニコしながら廊下に出て行った。

特に話しかけてくる奴もいないのに・・・なんか意識してしまうかもしれないが今のは夢だ・・・と思う。

まあ、僕があれこれ話してる間に掃除の時間だ。ちなみに僕の担当

は廊下だ。

「ああ、面倒くさい。」

と先生がいなくなってから愚痴をこぼしたのは今まで静かにしてた加藤友里と言う女だった。

ちょっと吃驚した。だって急に喋りだしたのだ、こいつも猫被りかと思って自分の中で処理しておいた。

「ねえ、福浦君！」

「な、何!？」

「聞いてくれる？」

なんか急に口調が穏やかになった

「あのさ、私。」

急に緊張が走った。頭が真っ白になった・・・まさかとは思うが・・・

寝坊、自己紹介（後書き）

長いのでここで一旦終わりにします。

次も早いうちに更新しますのでどうかヨロシク！！Σ（。＜π＞。）
ゞお願いします

なんとなく(前書き)

読者の皆さん♪感謝☆(人。▽。＊)☆感謝♪です。

これからがんばって更新していきます。

読んでくれる人がいる限り僕は日々とりあえず頑張ってます。

なんとなく

小学校でもあれだけ目立たなくて、告白もされた事ない僕が？
心構えができてない。

「今日なんか疲れたんだよね、愚痴聞いてくれる？」
「いいよ。」

はあ、びっくりした・・・そんな感じで心臓が止まるところだった。
ある意味助かった気がする。

「なんか今日あいつが・・・」
「へえ、そうなのか・・・」

と、掃除の時間ずっと愚痴を聞かされてたのである。

「やったー帰れるよ。」
「そういえば、今日から仮入部だな。」
「そうだ・・・忘れてた。どこ行こうか？」

忠志と部活を迷う事5分

「運動部は嫌だな。」
「僕もそうだ。」

それしか決まらなかった。

「拉致が明かないや。」
「だな、演劇部にでも行かないか？」

「とりあえず、そうしてみるか。」

「早く行かないと活動始まっちゃうな。」

「よし、行こう。」

この学校はやけにでかい。全校生徒が2千人いる、これだけでも可笑しいが学のクラス2年8組は3階これだけでも大変だが建物が一つしかないしかも小さいが、縦長である。だから、演劇部の部室は8階にあるのだ。ちなみに最上階は8階だ。文化部のくせに運動しないといけないと言うわけだ。ある意味、体力がつく？のだ。そして5分後。

「やっとついた！」

「棚、もうのぼるだけで精一杯だよな。」

「早く部室に入らないと！」

ガラガラ・・・ドアを開けた。

「失礼します。」

場の空気が和やかすぎる。それはそれでいいのかもしれない、でもこれは和やかすぎる。

「ようこそ！」

「予想通り？温かく迎えてくれた。」

声に出してはいけないうつを出してしまった。

「そろそろ活動始めるからここならんで。」

助かった・・・とりあえず、部長の指示に従って並んだ。こっそり

人数を数えた、今日の一年生の数は30人だ。予想より多かった。最初からお気づきの方もいるだろうが中学2年生で部活に入っていないのである。なのに仮入部は2年も当てはまる、色々変わった学校だ。

自己紹介もしないといけないですが・・・とりあえず、準備体操とあったらいいでしょう。発声から始めていきます・・・」

と色々部長の説明が5分続いたのであった・・・そして発声も終わり、σ（＾|＾；にとって悪夢のあれが始まるのである！

2 度目の自己紹介

「じゃあ、自己紹介していきましょう。じゃあ、君から!」

一番目に指名されたのはまさかだが・・・ぼくだった。

「ああ、えーと・・・学といいます。よろしくお願いします。」

「次は君から! どんどん左から順にいつて。」

と、ほのぼのとした自己紹介が終わり時計を見たが・・・最終下校は5時だった・・・4時半だ!

「もう時間なので、顧問の先生がいないのですが終わりにします!」

「気を付け! 礼!」

「お願いしまゝす。」

感想を言っていく時間だった。

「はい、気を付け! 礼!」

「ありがとうございます!」

やっと終わった。やっと帰れる。

意外と長い様に感じた部活を終えて帰るのであった。

そして朝

2 度目の自己紹介（後書き）

しばらく更新できなくてすいません
ちよっとしか更新してませんがヨロシク!!
 Σ (。
< π >。
) ッ

部活どうしよう

「おはよう。ご飯食べる。」

「ないよ、ごめんたべちゃった。」

ああ、ちなみにこれで一週間ずっと朝飯抜きだ。
力つきそう・・・

「よお、学！顔色悪いな？」

忠志だ。

「これで、一週間朝飯抜きでさ・・・もう、死んじゃうよ！」

「大丈夫だよ、そう言いながらも生きてるじゃん。」

「そりゃそうだけど・・・食べたいじゃん？」

「そのきもちわかんないな、だって毎朝食ってるもん。」

なんかむかついた。と、授業も終わり掃除の時間にもおこるこ
となく今日はやけに平和だった。

まあ、これも珍しいことだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0910s/>

人生何が起こるかわからない

2011年10月8日23時44分発行